

よろず見聞記 4 (20160320)

地層処分フォーラム ～対話活動のこれからを考える～

<分類：フォーラム>

資源エネルギー庁の「地層処分フォーラム ～対話活動のこれからを考える～」を訪ねました。今回は前3回とは異なり、筆者がパネルディスカッションにパネリストの一人として参加し「その場の当事者」でもあったので、見聞記には不向きかと躊躇しました。しかし、本プロジェクトのタシにしたいという初心を尊重し、ぎりぎりセーフにしました。内側からの観察（予断や偏見は極力排するよう努力しました）をするのだ、と整理した次第です。

<概要>

【日時／会場】 2016年3月20日（日・祝）14：00～16：00
東京国際交流会館 3階 メディアホール

【主催者】 経済産業省 資源エネルギー庁 （実施委託先） 株式会社 電通

【対象者】 優先)「地層処分フォーラム」に向けたワークショップ（3月6日）参加者20名
一般公募と優先をあわせて60人以上の出席

【場のづくり】 公聴を目的とした「政策説明他（30分）＋パネルディスカッション（70分）」
会場参加者と NUMO・資源エネルギー庁との意見交換（終了後 16：15～17：00）

【パネリスト】

八木絵香さん／コーディネーター（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授）

吉田英一さん／有識者（名古屋大学博物館教授）

木村 浩さん／有識者（NPO 法人 パブリック・アウトリーチ 研究企画部研究統括）

吉田省子／有識者（北海道大学大学院農学研究院 客員准教授）

Aさん／モニター参加者

Bさん／モニター参加者

Cさん／モニター参加者

Dさん／モニター参加者

3月6日のワークショップは3月20日のフォーラムに向けた勉強会で、20名の参加者に地層処分問題の現状や課題を知ってもらうものだった。情報提供後（45分）にグループディスカッションが行われ（105分）、理解できることや疑問点がまとめられた。インターネットモニターから無作為に34,000人が選ばれ、アンケート回答者の中から対象者条件や参加の許諾などを考慮し選ばれた方たちです。モニター参加者はその中の4名です。

【主たる内容】

1. 政策説明

資源エネルギー庁の小林大和さん（放射性廃棄物対策課課長）がスライドを使って地層処分に関する政策について説明し、池田真人さん（放射性廃棄物対策広報室長）が3月6日からの流れと今日の手順を説明した。

2. パネルディスカッション

1) 八木コーディネーターによるパネルディスカッションの趣旨説明（以下のような内容）。

- ・高レベル放射性廃棄物の取り扱いについては、国の地層処分という方針に対する否定的なものも含め多様な意見がある。そもそも論として、日本の原子力政策を根本的に見直さなければ、廃棄物の取り扱いは決められないとする主張もある。
- ・これらは大事な視点だ。しかし、一方で、様々な議論が進められてきた結果として、平成28年度中には「科学的有望地」が提示されることが、閣議決定した。
- ・敢えて「科学的有望地が提示されようとしている今」に着目し、もし提示されたらどのような対話が必要であるかに話題を絞り、そこをモニター参加者の皆さんと議論したい。

2) 有識者として参加した各自の立場と自己紹介を、吉田（英）（データをもとに地層処分の科学的有望地について説明する地質学者）、木村（資源エネルギー庁と共に地層処分に関するリスクコミュニケーションの場作りに携わった経験）、吉田（省）（地層処分以外での食と農に関する対話の場作りの経験）の順で行い、その後4人のモニター参加者が、3月6日のワークショップの感想やフォーラム当日までの間でどんな事を感じたかなどを述べた。

3) パネルディスカッション

コーディネーターは、意見交換がモニター参加者中心となるよう進行させ、場面に応じて、有識者に意見を述べるよう采配した。主題は、「もし、あなたの居住地が科学的有望地の範囲に入り、一部の人々が受け入れに前向きな姿勢を示したら、どう感じるか」、だった。

3. まとめ（10分） NUMO と資源エネルギー庁が今後に向けての感想を述べた。

<個人的感想>

資源エネルギー庁は 2015 年に高レベル放射性廃棄物の最終処分問題に関する全国シンポジウムや国民対話月間を開催し、筆者はそれらを札幌会場で観察したことがあります。その際、プログラム終了後に、NUMO 及び資源エネルギー庁と会場に来られた方との間で、質疑応答の場が設けられていました。そのときには主催者側が場を作ったことの真意をはかりかねましたが、今回のフォーラムでも同様な場が設けられたので、なるほど「広聴」が目的だったのかと分かりました。

広く意見を聴くやり方は多種多様です。今回は、主催者側がパネルディスカッションによるモニター参加者の発言を汲み取るという階層と、一般参加者と主催者側との終了後の質疑応答を通じた意見聴取という階層が組み合わさっていました。もっとも、参加申し込みチラシには後者の場についての記載はなく、「閉会 16:30（予定）」という微妙な言い回しがあるのみでした。

終了後に場が作られる本当の理由は分かりませんが、これは、広聴する側にとっては上手いやり方です。一方、異なる意見の持ち主にとっては、考慮してほしいと思っている方向に、願ったように事が進むわけではありませんから、このような仕組みのフォーラムは良くも悪くも「ガス抜き」です。冷めた目で見れば、ガス抜きの積み重ねで物事は進んでいくのかもしれませんが、場作りをする者としては忸怩たる思いが残ります。

さて、場の作り手と作った場を利用する人たちとの間には、思惑の違いが存在します。フォーラムは、広聴目的であり、しかも何ら合意形成を図る構成になっていない、とてもよく練れた場でした。しかしながら、その結果の利用の仕方は場の作り手やコーディネーターから離れ、如何様にも使われます。モニター参加者の意見や振る舞いが、やはりというか残念ながらというか、推進のための道具にされているのではないか、というささくれ立った思いが取り残されたままです。

文責 吉田省子

【言葉】 ※よろず見聞記 3 をご参照ください。

【吉田の「自己紹介」での発言～当日の本人メモから】

遺伝子組換え作物や BSE 問題で専門家と一般市民との対話に関わってきた。異論がある中で、推進・反対の双方から距離を置き、どちらにも組みしないように気をつけ、場作りを心掛けてきた。今回のような推進側に立脚した場作りの経験はない。その目からは、これは中間層の抱き込み作戦に見え、ソフトな説得工作に見える。また、地層処分というテーマが抱える問題群の複雑性が、処分地の立地問題に矮小化されているようにも見える。

地層処分の問題は、日本学術会議の提案も含め、様々な角度から私たち自らが考えなければならないことも事実だ。このフォーラムは「広報」でも「合意形成」でもなく「広聴」だという建前なので、この枠組みに多少の違和感があっても考える一歩だというのは、その通りだと思う。

主催者側が国民と共に考えたいと思っているなら、(これとは違う) 色々な形の対話の場が思い浮かぶが、今回は限られた時間という制約があると理解している。事前勉強会に参加された皆様は、生活者の視点から熱心に意見を述べておられた。その代表である4人の皆さまに期待します。